

〔研究ノート〕

## 留学生の「日本語プレゼンテーション」実践 —教師フィードバックと学習者の「振り返り」を中心に—

How to Improve Presentation in Japanese by  
Foreign Students: Self-Reflection and Teacher Feedback

山田陽子  
Yoko Yamada

- 1 はじめに
- 2 授業実践と指導プロセス
- 3 教師フィードバックスライド内容と話し方に関する教師フィードバックの学習者への反映
- 4 振り返り—より良い「日本語プレゼンテーション」のために
- 5 おわりに—日本語学習者の課題と教師の課題

**要旨：**本稿では、教師の役割に関して、学習者の次期発表機会に生かせる課題解決方法の一つである教師フィードバックの反映とタイミングについて検討を行った。これまで日本語学習者自身の「振り返り」の意義に関する指摘は少ないが、授業改善を目的とするならば学習者自身による授業の振り返りが必要であろう。そこで本稿では、大学の留学生を対象とした「日本語プレゼンテーション」授業での口頭表現技術、研究調査、スライド作成、発表態度等実践プロセスから、日本語学習者自身が向上を自覚できた日本語能力、より良いプレゼンテーションのあり方、授業の成果、課題等を検討し留学生の日本語授業における「振り返り」の意義を指摘する。本研究の位置付けは、留学生の授業実態に即した教育体制を構築するための基盤研究である。

**キーワード：**留学生 日本語プレゼンテーション 振り返り 教師フィードバック 異文化間コミュニケーション

### 1. はじめに

本研究の背景および「日本語プレゼンテーション」授業の意義・役割、留学生（日本語学習者）のプロフィール、実践例、授業デザインに関しては前号（『人間文化研究』17号）<sup>1)</sup>で、また授業実践の学習プロセスに関しては、日本語教育学会研究集会<sup>2)</sup>において報告している。参照されたい。本稿では、前号に続き日本語プレゼンテーションの実践プロセスから教師の役割、学習者の

振り返り、授業の成果と課題を検討する。本研究対象の大学における日本語プログラムは、「日本語プレゼンテーション」のほかにリーディング、リスニング、ライティング、ディスカッションの授業がある。「日本語プレゼンテーション」授業では、学部留学生の専門科目への架橋および研究発表に役立つように、多くの人の前で「話す」能力、「説明する」能力、「発表する」能力を身につけることを目標にした。

## 2. 授業実践と指導プロセス

プレゼンテーションのテーマ決定から発表会までの実践内容を見ていく。

### 1) 日本語プレゼンテーション発表会のテーマを決める

学習者自身が関心のあるテーマを考え、仮テーマとして決めておく。調査結果や内容構成により、テーマを見直し確定する。

### 2) 研究調査と発表練習

- ①インタビュー、アンケート、聞き取り、インターネット検索、文献調査等の実施  
(質問紙・アンケート用紙など作成→内容の確認作業)
- ②インタビューやアンケート調査に必要な会話練習

### 学習者が行うフィールド調査

日本語学習者（以下、学習者）は主たるインタビュー場所を大学生協食堂とした。日本人大学生と留学生が多く集まる場所で、インタビューしやすいという理由からである。インタビューの項目をリストアップし、調査対象者が答えやすいように質問の仕方に工夫するよう指導した。アンケート調査の場合は、調査者である学習者がアンケート用紙をあらかじめ日本語で作成し、それを教師がチェックして、間違いを指摘し修正を指示した。調査者が学内で日本人学生、教職員と留学生にアンケートやインタビューを実施した。

学習者が調査に出かける前に、教師は授業で以下の項目を確認する作業を行った。

[確認事項]

1. 何を調べたいのか（調査項目）、それらはテーマに沿ったものか。
2. 何のために調べるのか（調査目的）。
3. 誰に聞くのか（調査対象者）、どのくらいの人たちに聞くのか（調査人数）。
4. どこで聞くのか（インタビューの場所）。

### 調査方法を決定し発表する

学習者10名の調査方法は、インタビューが9名、アンケート調査が1名であった。その他情報収集としてインターネット検索と文献調査を行った。質問項目を作成し、プリントの質問項目欄

に記述してもらった。どのような調査を行うのか、質問をする場合はどのような質問をするのか、あらかじめ学習者に口頭発表をしてもらい、事前準備のための指導を行った。

### 3) プレゼンテーションの組み立て

#### ①基本的な3段構成 序論→本論→結論

序論・・・はじめの挨拶・簡単な自己紹介・テーマ紹介・テーマ選択の理由・研究調査方法・調査対象者

本論・・・調査内容の報告・具体例・内容の概要・分析・まとめ

結論・・・考察・結論（調査からわかったこと、自分の意見・考え）・終わりの挨拶

#### ②概要発表

学習者によるプレゼンテーションの内容発表

### プレゼンテーション発表までの部分練習

各授業日に、学習者がそれぞれ作成した視覚資料（スライド）を見ながら「部分」ごとの発表練習を行った。日本語プレゼンテーション全体を内容的にまとまりのある部分に区切り、90分授業の中で10名の「話す」、「説明する」練習を段階的に行った。発表の際には、声の大きさ・高さ・間（ま）・速さに留意するよう指導した。また、「話す」練習の前に発声練習をし、ウォーミングアップを行った。あ行からわ行までの発声練習表を作成し、学習者に配布し、発声指導を行った。

### 視覚資料作成（Microsoft PowerPointによるスライド10枚）と口頭発表練習の流れ

- ① 1－2枚目のスライド部分 [挨拶・自己紹介とテーマの発表・そのテーマを選んだ理由] を口頭発表練習
- ② 3－4枚目のスライド部分 [調査対象者と調査方法]を説明・口頭発表練習
- ③ 5－6枚目のスライド部分 [質問項目あるいはアンケート質問紙項目]についての説明・口頭発表練習
- ④ 7枚目のスライド部分 [調査結果]の説明・口頭発表練習
- ⑤ 8枚目のスライド部分 [調査結果をもとに考察]した内容について説明・口頭発表練習
- ⑥ 9枚目のスライド部分 [まとめ・結論]を説明・口頭発表練習
- ⑦ 10枚目のスライド部分 [最後の挨拶・お礼のこトバ] 口頭発表練習
- ⑧ 全体練習（スライド1から10までを通して口頭発表）

このように、部分的にステップを踏みながら発表練習を重ねていくことで、学習者に「話す」要領が身についてきた。また、ひとつひとつの項目内容を熟考し丁寧に話すことができるように

なった。徐々に学習者は自信を深めていった。学習者は、この活動を通して「人前で」発表する不安感が薄れていった。段階的に授業を組み立てることで、上記の成果を確認できた。

さて、効果的な視覚資料というのは、内容がよくわかる資料のことである。スライド作成にあたり、中間発表では10枚程度、期末発表では13枚程度におさまるように計画を立てた。中間発表を発展させたものが期末発表という位置付けにし、中間発表をさらに発展させ、深く考察を加えることにした。大きいテーマの枠内で分析視点を変え、相互に関連があるものにした。当初は中間発表とは別の新しいテーマに取り組むことを考えていた。しかし、二つの発表間の授業数が多くないこと、日本語レベルの問題から調査への負担感があること、中間発表テーマに深い考察を加えた発表をしたいと考える留学生の存在等から、学習者の希望に沿ってフレキシブルに対応することに決めた。スライド作成では、聞き手が一目見てスライドの内容を理解できるように、文章形式ではなく、メッセージ（伝えたい内容）をフレーズ化<sup>3)</sup>したり、図解化（イラスト、絵、グラフ、図表等）の工夫を行うように教師は指導した。

図1 フレーズ化の例

ごみ問題に関心をもつことです	ごみ問題への関心
環境を保護する	環境保護

写真、イラスト、グラフ、図表等を入れすぎてかえって見にくくならないように、またスライドは次の①②の観点から簡潔に整理して書き、スライド内容の補足説明を口頭で行うように指導した。

①文字の大きさとレイアウトを考える。

「日本語」学習が目的のため、スライド作成の際の図解化に関しては、聞き手の理解を深めることのみを目的に行った。視覚資料（スライド）は、聞き手にわかりやすく伝える役割があるだけではなく、話し手のプレゼン力をアップさせ信頼感を高める効果もある。

②スライド内容において、誤字・脱字、日本語表記上の問題がないか教師と学習者とで確認作業を行った。

#### 4) 表現技術の学習（言語と非言語表現の一体化）

教師は学習者に対して、ことばの用法、声の大きさ・高さ・話す速さ、話の間、アイ・コンタクト、身振り、立ち位置、姿勢、原稿の持ち方、服装に関する説明を行った。発表の際のはじめと終わりの挨拶は、教室の参加者一同を見て笑顔で明るく行うように指導した。

①最初のことばの練習（自己紹介・あいさつ、テーマ）

②最後のことばの練習[ご清聴（ご静聴）ありがとうございました]

#### 5) リハーサルの実施

実施は以下の①から⑥を考慮し行った。

- ①発表会と同じ教室で同じ機器と資料を使用し、全体を通して練習を行う。
- ②時間を計り、決められた時間内に終了できるように練習する。
- ③なるべく原稿を見ないで発表できるようにする。
- ④発表内容、日本語表現、話し方、発表態度を日本語学習者が相互に評価し合う（チェックシートを配布）。
- ⑤質疑応答ストラテジーを学習する（答えられない質問がきたときの対応も考える）。
- ⑥聞き手として、ほかの人の発表をよく聞き、内容に関する質問を考える（質問シートを配布）。

リハーサルでは、スライドを1枚ずつ見ながら、一人10分程度のカンファレンス<sup>4)</sup>を行い、誤字・脱字・表現上の誤りを学習者に口頭で指摘した。同様に口頭発表原稿の日本語表現も修正するように伝えた。学習者は教師の日本語説明を理解し、返答した。教師が指摘した内容を忘れない内にノートに書いておくよう学習者に伝えた。

## 6) 発表会（発表→質疑応答）

中間発表は8分、期末発表は10分で日本語プレゼンテーションを行った。5名ずつ2週に分け、二度の発表会を実施した。発表会は公開プレゼンテーション形式をとり、外国人留学生だけではなく、日本語母語話者にも参加してもらった。授業担当教師だけではなく、できるだけ多くの人から日本語を学ぶ機会を学習者に提供するためである。日本語母語話者と学習者からの多様な質問と、それらへの発表者の応答により日本語の聴解能力、対話力を育む実践の展開が確認できた。

発表者以外の受講生9名は、「聞き手」の立場から積極的に日本語で質問をした。聞き手側のゲストとして、日本人大学教員1名、大学職員1名、受講生以外の留学生3名（イタリアからの交換留学生）、日本人大学生（3年生と4年生）6名が発表会に参加した。発表会参加者はビデオ撮影者、授業担当の筆者を加え、合計23名である。

発表会参加者には、発表の中に出てくる新出語を説明したリスト・語彙表を配布した。日本語母語話者の大学教員と大学生から学習者の発表内容に関する質問があった。留学生対象の発表会参加に慣れている日本人大学生や学習者のチューター、留学生宿舎の世話係をつとめる学生が参加したため、質問の日本語表現、話す速さに日本語学習者への配慮が見られた。

一方、学習者にとっては日頃から学習の手伝い、生活面でのサポートをしてくれている日本語母語話者の参加により、安心して発表に臨む点も見受けられた。このように日本語母語話者からの質問のみならず、聞き手としての学習者からの質問もあり、活発な質疑応答の場となった。発表から質疑応答に至るまでの言語活動から、学習者は大勢の人たちに対する伝え方を学んだ。日本語母語話者の場合、発表者の文化的背景に関心があり、発表内容よりも発表者本人に関する質問に特徴が見られ、日本語学習者からは、発表者の日本語による説明内容の不足点を指摘するなど発表内容そのものに関する質問が多く寄せられた。

表 1 日本語母語話者と学習者の質問の特徴

日本語母語話者の主な質問	発表者の国の事情 発表者の文化的背景
日本語学習者の主な質問	発表内容の確認 テーマと結論の論理性

質問を受けた際には、発表者は質問に該当するスライドを再び提示し説明するようにした。大部分の発表者は質問に対して適切に答えることができたが、中には質問の回答が冗舌で、長すぎたものもあり、次回発表時の課題となった。質疑応答の際には、質問者と発表者二人だけの時間になってしまわないよう、会場の出席者全員に考慮しながら回答するような心がけが重要である。

日本語科目以外に、実際の学部の一般的な授業では、日本語母語話者の大学教員、大学生、日本語学習者がコミュニケーションを取り合う場面が出てくるだろう。このような現状を踏まれば、学部授業と同様の日本語環境設定で発表が行われたことになり有意義であった。いわば異文化間コミュニケーションの観点から発表会を構築することで、日本語能力だけではなく、異文化間の相互理解を深める機会にもなった。日本人との異文化接触の機会をとらえ、質疑応答を学習できるのも「日本語プレゼンテーション」授業の利点である。日本語プレゼンテーション発表会を、国際交流推進センタースタッフにビデオ収録してもらった。

教師は発表の評価を以下の①から④の観点から行った。

- ①内容（目的、構成、調査）、②話し方（日本語の確かさ、発音、声の大きさ、話す速度）、
- ③発表態度、④時間

ヨーロッパ圏ドイツから来ている学生は自国の再生エネルギー政策に関する発表内容、中国からの学生は歴史認識に関する大学生への調査、韓国からの学生は韓流に関する日本事情をとりあげた。その他の学生の発表内容としては、来日後に気づいた日本の環境問題（水資源保護、ゴミ問題など）に関するものが多かった。学習者出身国独自の科学技術に関する用語・専門用語については、教師と学習者が協働で新出語リスト・語彙表を作成し、参加者全員に配布した。以上の授業実践から、教師の果たした役割をまとめると以下の①から⑤のようになる。

- ①口頭表現技術の指導、②発表スキルの指導、③日本語プレゼンテーションの特性への理解促進、
- ④コミュニケーション能力の育成、⑤学習者同士、学習者と日本語母語話者のコーディネーター

表2 学習者の日本語とスライド内容に関する特徴

(学習者10名のスライド内容分析、調査期間2011年12月～2012年1月)

特 徴	(人)
日本語表現に誤りがほとんどない。	9
やさしい日本語で説明され、発表内容がわかりやすい。	5
母語の影響による漢字熟語の誤用が見られる。	4
助詞の誤用が見られる。	3
カジュアルな日本語、若者ことばが多い。	2
文章形式で書かれ、フレーズ化されていない。	1
-----	-----
テーマに沿った内容の説明が詳しくされている。	5
図表を生かした分かりやすい構成。	4
インターネット資料の引用が多い。	4
文字の大きさ、配置が適切。	3
1枚のスライドに多くの情報が記載されている。	3
写真が多く文字が少ない。	1

### 3. 教師フィードバックスライド内容と話し方に関する教師フィードバックの学習者への反映

日本語プレゼンテーションの授業では、発表してしまえば完了ということではなく、授業での教師フィードバック、発表時の聞き手である日本語学習者からのフィードバック<sup>5)</sup>を通して、より良いプレゼンテーションのあり方を日本語学習者全員で考える機会としている。どのような形態のフィードバックが日本語学習者の発表改善や日本語能力向上につながるのだろうか。

授業の中では、教師のコメントだけではなく、日本語学習者の意見や考えを重視した。日本語学習者は、それぞれプレゼンターであると同時に聞き手でもある。聞き手にわかりやすく伝わっているかどうか、聞き手の立場から見て、プレゼンテーションを評価することも重要である。発表練習の際には、同じ授業を共有する学習者同士がスライドの内容や発表の仕方、日本語の誤りについて相互にアドバイスを行うピアフィードバック方式を採用入れた。日本語学習者としての同じ仲間からのピアフィードバックは、日本語能力の面、プレゼンテーション能力の面からの指摘が多かった。たとえば、「発表者のスライドに書かれている漢字熟語が日本語にはない」、「発表者の声が小さい」という指摘、「原稿を見てばかりいないで聞き手を意識したほうがよい」という発表態度に関するアドバイス、スライド内容に関する説明不足の指摘などが多かった。

この授業では、中間発表と期末発表の2回の発表機会を設けている。次回の発表に今回の発表が生きるよう、教師として学習者ひとりひとりにスライド内容、日本語表現、話し方、発表態度に関する改善に向けた指摘を行った。教師からのフィードバックは学習者のプレゼンテーションに反映されたのだろうか。学習者それぞれのスライド内容に関する教師フィードバックの学習者への反映について考えたい。

スライド内容に関して、1回目のリハーサル時の教師からの指摘やコメントを翌週の発表時に



生かしていない学習者が多かった。教師は一方向的に学習者のスライド内容の修正を求めることはせず、学習者に説明を求め、双方が相談の上で修正するという方法をとった。教師が口頭で伝えたことを学生はノートに書きとめず、記録として残していなかった。

授業内における教師の口頭によるフィードバックが反映されなかったことで、次に授業外活動を行うことにした。メール本文に修正すべき内容を詳述し、該当する学生（修正を必要とする学生）に送信した。メールであれば、パーソナルな指摘を学習者が1人のときにゆっくり読めるし、メールを保存していつでも読めるという利点がある。学習者からメールが届いた旨、返信があった。

しかし、このメールの方法でも翌週のスライド内容に反映させていない学生がいた。そこで、口頭とメールによる伝達方法に加えて、用紙に修正内容を記述し学生に対面指導の形式で口頭による説明を加え直接手渡した。これら授業内、授業外活動の一連の試行を通して、教師フィードバックが次の発表機会に反映され生かされたことを確認できた。

授業では教師からのフィードバックとして、まず口頭で伝える、続いて修正内容を記述してメールで送る方法、最後に修正内容を用紙に記述し学生に直接手渡すという多重フィードバック形式を採用した。各々の方法により、どのくらいの学生の発表内容に教師フィードバックが反映されたのか表に示した。

表3 スライド内容に関する教師フィードバックの反映

(フィードバック期間：リハーサル時～本番までの3週間)  
 (「全部反映された」、「大体反映された」、「全く反映されなかった」、それぞれの学生数)

方法	反映	全部反映	大体反映	全く反映されなかった(人)
口頭		1	0	9
口頭+メール		1	4	5
口頭+メール+記述用紙		10	0	0

教師フィードバックは、口頭だけの場合、反映率は10%、口頭の上で、さらにメールでのフィードバックの反映率は50%、その後記述用紙によるフィードバックの反映率は100%に達したことが確認できた。わずかに10名の留学生調査ではあるが、教師フィードバックに関しては、3つの方法をすべて行う多重フィードバックで効果が認められたものの、教師のフィードバックがそもそも学習者にとって良いことなのかどうかという観点も含め、今後の研究課題としたい。教師がスライド内容の修正を求めた理由を学習者が理解し納得して書き直したかどうか、日本語プレゼンテーションの授業実践により教師フィードバックのあり方を考える契機となった。

教師フィードバックが学習者の推敲活動の活性化を意味するのかという疑問を抱いた広瀬(2007)は、教師の指摘どおりに原稿を書き直したことは、学習者の内部で必要なものとして認



識された結果行われたのかどうかは不明であると述べている（広瀬、2007、151）。そして教師という絶対的な存在からの指摘を無批判に受け入れることは、かえって学習者の自律的な推敲活動を阻害することになるのではないかと指摘しており（前掲書）、この点については学習者への実態調査を積み重ねながら深く議論しなければならない課題である。一方、教師は学習者との間で、フィードバックや対面指導など多くのやりとりを通じて心的交流の深まりを感じたことは確かである。

スライドの内容ではなく、話し方・口頭表現技術に関する学習者への教師フィードバックはどのようなだろうか。教師は学習者の発表練習時に気づいた発音の誤り、話す速さなど改善した方がよい箇所を指摘し、その場で口頭練習させた。宿題として課すのではなく、その場で口頭練習を課したため、学習者はすぐに教師が指摘した箇所の練習に取り組み、発音と話す速さの改善が見られた。本研究において前号で行ったニーズ分析<sup>6)</sup>から、大部分の学習者はスライド上に文字を「書く」ことよりも日本語プレゼンテーションの「話す」口頭表現技術の向上に深い関心のあることがわかっていた。また教師から修正を求められたときには、後から修正しなくて済む現場での修正、即時対応型を好む特徴があった。このことから、教師はフィードバックの方法だけではなく、タイミングについても検討する必要性を感じた。

#### 4. 振り返りーより良い「日本語プレゼンテーション」のために

「振り返り」に関しては、日本語教師が実施した授業の「振り返り」を「観察」と位置付け、「良い授業」に近づけたかどうか振り返って見なければならぬとの副島（1999）の指摘がある。本稿では、「日本語プレゼンテーション」授業に関する教師の授業改善のための観察を実施すると同時に、学習者自身の「振り返り」の意義についても検討したい。

日本語プレゼンテーション発表会後の授業で、教師と学習者が発表会DVD（ビデオ撮影）を見ながら、話し方・声の大きさ・発表態度、質疑応答などを振り返り<sup>7)</sup>、課題を探究した。このような客観的な観察は、学習者自身が発表で気づかなかったことを発見できるとともに教師と学習仲間からアドバイスを受けることができ、改善に繋がる。

外国人留学生の日本語プレゼンテーションと日本人大学生のプレゼンテーションの相違点は、日本語能力以外では「臨機応変さ」にあると考えられる。日本語母語話者ならスピーチメモ程度のものであれば、プレゼンテーションを難なくこなせる場合が多い。しかし留学生の場合は、慣れるまではスライドごとに発表原稿を作成し、それを見ながら発表することが多い。時間に合わせて臨機応変に話すことやアドリブを入れるだけの余裕はない。しかしながら「日本語プレゼンテーション発表会」では、リハーサル時の気づきをもとに練習を積んできた学習者が多く、本番で原稿をずっと見て話す学習者はほとんどいなかった。また10人全員が規定時間内に発表を終えることができた。

発表後に、「復習レポート」と題した振り返りシートを学習者自身が記述するプリントとして用意した。課題を次の発表で解決できるように振り返ることの重要性を学習者に説明した。振り返りシートに、学習者が工夫・努力した点、困難を覚えた点、今後の課題等を「研究調査の過程」、「日本語の話し方」、「発表態度」の項目別に自由記述してもらった。また聞き手になったときには、各発表者に対し率先して質問することで日本語能力の向上に繋がることも発表DVDの振り返り作業から後述のように確認できた。

### 1 回目の発表（中間）と 2 回目の発表（期末）を比べ、改善が見られた点

（発表DVDによる振り返りと教師の参与観察から）

- ①日本語表現が的確になった、②話し方では、声が大きくなり、自信をもって話せるようになった、③原稿を見ないで発表でき、発表態度の向上が感じられた、④研究調査能力に関しては、より深いインタビューや文献調査ができるようになった、⑤活発な質疑応答ができるようになった。

学習者が発表後に書いた振り返りシートから、日本語学習者が向上したと思う点と今後の課題を取り上げると次表のような結果になった。

表 4 日本語プレゼンテーションの授業を通じて向上したと思う点

（学習者の自由記述による複数回答）

向上したと思う点	(人)
日本語の口頭発表能力が身についた	5
人前で話すことに自信と満足感をもつことができた	3
アクセントをつけた話し方がわかった	1
文法と日本語表現を学ぶことができた	1
情報収集能力が身についた	2
アンケートの分析とまとめ方がわかった	1
アンケート用紙の作り方がわかった	1
スライド作成能力が身についた	1
考える力とまとめる力が向上した	1

表 5 中間発表（2011年11月末）と期末発表（2012年1月末）の比較

（学習者の自由記述による複数回答）

中間発表と期末発表の相違点（期末発表でできたこと）	(人)
話すスピードがよくなった	2
原稿を見ないで、スライドを指し示しながら話すことができた	1
新しい日本語表現を使用した	1
発表がスムーズにできた	1
発表内容がよくなった	1
発表しただけではなく、質問に答えることができた	1
緊張しなかった	2

落ち着いて発表できた	1
自分の気持ちをみんなに伝えることができた	1
アイ・コンタクトができた	1
テーマに関する深い調査ができるようになった	2
テーマに関する専門性の向上を感じた	1
スライドの作成方法がわかり、みんなにわかるスライドを作ることができた	2
スライドが文字ばかりだったが、発表内容に合った写真を取り入れた	1
スライドの内容が充実した	1
スライド作成が十分にできた	1

表6 今後の生かし方

(学習者の自由記述による複数回答)

生かし方	(人)
授業の課題発表に	2
会社でのプレゼンテーションに	2
学会発表に	1
ゼミ発表に	1
専門科目に	1
帰国後に日本語と母語での発表時に	1
帰国後、仕事に	1
帰国後、調査活動に	1

表7 今後の課題

(学習者の自由記述による複数回答)

今後の課題	(人)
日本語の話し方	5
正しい発音	3
調査能力(説得力のある調査データ)	2
発表内容の充実	1
日本語文法	1
日本語聴解能力	1

表8 発表後の感想

- ① 自国以外の人たちと親しい交流ができてよかった
- ② 様々な国のことについて知識が増えた
- ③ 専攻する分野の勉強に役立った
- ④ 話し方、視線の当て方、手の動き、顔の表情の大切さがわかった
- ⑤ 第1回目の発表を反省し、第2回目の発表に生かしもっとがんばりたいと思った
- ⑥ 調査の方法がわかったので、今後はもっと深くインタビューできるようにしたい
- ⑦ 関心のある分野から自由にテーマを決めることができたので意欲的にのぞめた

学習者は発表体験を通して、口頭発表能力が向上し、人前で話すことに自信をもつことができたこと、今後の課題としては「話し方」、「発音」等であることがわかる。学習者の「振り返り」は、自己課題を発見することができるという点に意義がある。また、テーマの決定で重要なことは、学習者自身が興味、関心をもち、15回の授業の間、意欲を持ち続けられるテーマを選択することである。学習にとって意味があり、内容を伴ったテーマでなければ意欲的な取り組みは困難である。

学習者の感想から、日本語プレゼンテーションの授業は、多様な文化的背景からの知識の獲得、専攻分野への架橋的役割を果たしていることがわかる。学習者は「振り返り」を通じて、常に改善の余地を探る習慣を身につけることが重要といえよう。

## 5 おわりに—日本語学習者の課題と教師の課題

日本語プレゼンテーションの授業実践から、学習者はプレゼンターとしての「話す力」、「研究調査能力」の向上を自覚していた。

日本語表現に関して、学習者の発音の誤りを教師が口頭で指摘し、正確な発音ができるように口頭練習を行った。教師が常に学習者の発表に高い期待を寄せている姿勢をもち、学習者の意識に変化をもたらす発表意欲に繋がっていくと考えた。

発表会では、発表者に対して質問をする学習者が多数存在した。ということは、日本語の発表内容を聞き取れただけでなく、内容を把握できたこと、その中で疑問点を発見し、日本語で質問できる力が身についたことを意味している。学習者の中には積極的に発表者に質問を寄せることで質疑応答時間を異文化接触の場として活用している者がいた。このように「日本語プレゼンテーション」という科目は、話し手と聞き手の両体験を通じて、留学生の日本語習得の一助になっていると考えられる。

学習者の課題は、プレゼンテーションの内容構成を考える前に、テーマに対する深い掘り下げ、的確な調査などプレゼン内容そのものの充実とそれを生かす日本語能力の向上である。そのためには、授業の中だけではなく、事前準備が必要である。プレゼンテーション発表に向けた計画を学習者各自が明確に立て、その計画に沿って資料収集や内容の吟味を行なっておくことが重要である。それらの事前準備が整ったうえで、日本語の口頭表現技術としてのプレゼンテーションの練習に入ることができるのである。その練習の中には、話す速さ、声の高低、大きさなどの調整や発表態度等も含まれる。プレゼンターも聞き手も日本語母語話者である場合と異なり、外国人留学生の発表に対して、聞き手は発表内容より先に日本語能力に評価を集中させる傾向にある。しかし日本語能力だけではなく、研究発表のための論理性もまた日本語プレゼンテーションには求められることを学習者は実践から学びとった。

発表会において、原稿を見ることなく、スライドを指差しながらわかりやすく説明できるプレ

ゼン能力と、日本語で丁寧に説明できる能力をあわせもつ留学生も存在している。1回目の発表と2回目の発表を学習者10名についてそれぞれ比べてみると、2回目の発表では言語と非言語要素（ボディランゲージ、アイ・コンタクト等）の両方を生かしたプレゼンテーションが見られるようになった。発表体験の増加により、日本語の話す力、説明する力に加え、聞き手に「わかりやすく伝える力」が身についてきたと考えられる。

教師は学習者に対する授業中および授業外に行ったフィードバックを通じて、その反映の困難を感じる一方、交流の深まりも感じることができた。教師の課題は、学習者が真に伝えたいことを表出するための具体的な話し方や日本語プレゼンテーションを通して個々の学習者のどのような能力を伸ばさせるのかという観点からの明確な目標を掲げた教授活動である。今後も国際交流を育みながら留学生の学習実態に即した教育支援となるきめ細かい実践指導に取り組みたい。

**謝辞** 本研究にあたり、ご協力いただいた皆様に感謝申し上げます。

#### 注

- 1) 山田陽子 (2012a) 「スライド作成と口頭表現技術を学ぶ日本語教育一留学生の「日本語プレゼンテーション授業」から一」『人間文化研究』第17号、169-180頁。留学生の性別、年齢、国籍、滞日歴、日本語学習歴に関しては、172頁掲載の表1を参照されたい。
- 2) 山田陽子 (2012b) 「留学生対象の『日本語プレゼンテーション』授業実践報告一話し方・研究調査・スライド作成の学習プロセスから一」日本語教育学会『日本語教育学会北陸地区第3回研究集会予稿集』11-12頁。
- 3) フレーズ化の代表的なものに、体言（名詞・代名詞）でとめる方法がある。そうすることで、聴衆が内容を一目で理解できるという効果が期待される。
- 4) この場合の「カンファレンス」とは、主に授業中に教師が学生に対してスライド内容と発表原稿についての不明点を確認する作業を指している。この作業において日本語表現上、不適切と思われる箇所については直したほうが内容面でより良くなる旨の指摘をした。日本語で行い、教師と学生相互のコミュニケーションがとれていることを確認した。
- 5) フィードバックとは、結果を原因に反映させることをいう。評価結果を日本語学習者本人に伝えることを指している。本稿では、教師や受講仲間の日本語学習者が発表者に対して文法上、内容上の誤りや気づいた点を伝えることおよび教師がスライドの日本語表現、原稿を添削することなどを含めて使う。同じ学習仲間の留学生からのコメントや意見、指摘などをピアフィードバックという。
- 6) 山田陽子 (2012a) 173頁。
- 7) 本稿では授業での学習過程、とりわけ発表行動を思い返し、話し方、スライド内容、日本語表現、発表態度等で気づいたことを教師と学習者とで話し合い、次の発表につなげることを指している。

#### 参考文献

- 奥村訓代 (2005) 「大学の学部における日本語教育の使命と役割—PowerPointを利用したプレゼンテーションの実践—」日本語教育学会『日本語教育』126号、pp55-64
- 副島健治 (1999) 「日本語教育実践における授業の振り返り」立命館大学言語センター『ポリグロシア』第2巻、pp95-107
- 広瀬和佳子 (2007) 「教師フィードバックが日本語学習者の作文に与える影響—コメントとカンファレンスの比較を中心に—」早稲田大学日本語教育研究科『早稲田大学日本語教育研究センター紀要』20、pp137-155

- 福井有監修・大島武編著（2009）『プレゼンテーション概論』樹村房
- 森脇道子監修・武田秀子編著（2011）『ビジネスプレゼンテーション改訂版』実教出版
- 山田陽子（2012a）「スライド作成と口頭表現技術を学ぶ日本語教育—留学生の『日本語プレゼンテーション授業』から—」『人間文化研究』第17号、pp169-180
- 山田陽子（2012b）「留学生対象の『日本語プレゼンテーション』授業実践報告—話し方・研究調査・スライド作成の学習プロセスから—」日本語教育学会『日本語教育学会北陸地区第3回研究集会予稿集』pp11-12
- 山田陽子（2012c）『コミュニケーションのための話し方練習帳』黎明書房
- 山田陽子（2012d）「『日本語プレゼンテーション』授業における学習者自身の『振り返り』の意義」『日本語教育学会中国地区第9回研究集会』